# せつな系植物楽（しょくぶつがく）
# 植物ほろほろ

絵・文　鶴馬直美

## 才四葉　ヒバ

◆

何年か前の大雪の日、私の住んでいるマンション入口の二本のヒバの木が、雪の重みに耐えかねて、横倒しになってしまった。いちめんの銀世界の中、志し半ばで行き倒れてしまった人みたいで、コリャ大変と一大救出作業を開始した。降り積もった雪を両手で払い、茶褐色の幹と緑葉を掘り起こすと、身震いしながら少しからだをもたげた。

「ふは～、助かりましたよ。死ぬかと思った」
「よかった。でも、まだまだですよ」
そうなのだ。どんどん雪は降りしきり、ヒバの木さんのからだを被いつくしてゆく。ヒバの木さんは再び目を閉じ、意識が遠のいてゆくご様子。
「だめです、だめです、寝たらいけない」
雪を払いヒバの木さんの倒れたからだに肩を入れ込み、力の限り踏ん張りながら、直立体制にもっていこうとがんばる。同じマンションの住人が通りかかるが無関心。なんで誰も助けてくれないんだよぉ～、こんなに困っている人がいるのに～。怒りのパワーでなんとか直立させると、ヒバの木さんは今度こそ完全復活したように、どどーっと、全身身震いさせ降り積もった雪を落とした。でもちょっと力を抜くと倒れてしまう。頑丈な配水管に、ビニール紐でヒバの木さんのからだを縛りつけ、やっと自立させた。
その日から二本のヒバの木さんたちは、配水管に支えられながら、雨の日も風の日も、もろともせずにすくすく育った。まっすぐ育ったヒバの木さんが、ベランダ越しに覗き込む。ふさふさした緑葉がおどけた人の表情で、「どうしたの？　今日は元気ないね」などと話しかけてくれる。ときどきスズメやヒヨドリとたわむれ、小鳥たちのさえずりを届けてくれる。あの日以来、ヒバの木さんと友達になった。

◆◆

ちょっと前にＮＨＫテレビで、北海道富良野の森のエゾマツさんとトドマツさんの越冬の様子の番組を見た。
パキーン――

極寒の富良野の森に鳴り響く衝撃的な音。トドマツの凍裂――あまりの低音のためトドマツさんは幹の内部を破裂させる。そのときの破裂音が、パキーン――。木が叫んでいる！――雪の重みで倒れたあのときのヒバの木さんたちの痛みがよみがえる。夏の日、キョウチクトウの細長い実を折り取ったとき、滴り落ちた大量の水にキョウチクトウの叫びを見た。植物くんたちのさまざまな叫びの記憶が、いっきに押し寄せる――内側には氷の粒がびっしり。幹の中心にまで亀裂、と大写し。これが原因で枯れることも、とナレーション。枯れたトドマツの木の画。一本の木に積もる雪の重みは数百キロ。静寂の白銀の世界……太い枝が重みに堪えきれず、どど－っと崩れ落ちる。雪煙る大往生！

◆◆◆

ホットカーペットと暖房でぬくぬくの部屋の中に私はいた。カーテンのしまったベランダ窓の向こう側が、ヒューヒュー吹雪く富良野の森に一変する。配水管に縛りつけられたヒバの木さんたちが、寒さにふるえている。

▲マツボックリ（ダンススタジオ入口にて2001.11.23拾う）

◆◆◆◆

場面は変わりエゾマツさんの話に――　一本のエゾマツには三千個近いマツボックリがなる。一個のマツボックリは二百個の種を抱えている。ということは、ニサンがロクで、六十万個の種をエゾマツ一本が宿すことになる。秋にその種の半分を地上に落とす。けれど、土の中の細菌に弱いエゾマツの種は、すぐに腐ってしまう。――せっかく生まれてきたのに芽を出さず土に返る種の気持ち……ちいさなからだを土に同化させ、肥沃な土壌を作り出す。それは芽を出すこと以上に価値あることなのだ。

千個以上の閉じたマツボックリが冬を待つ。氷点下十度の世界。丈夫なマツボックリに守られた種は、マイナス七十度にも耐えられる。彼らは雪の結晶が崩れることなく、上空から落ちてくる日を待ち続ける。

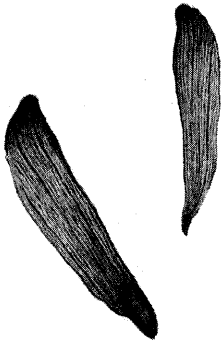
冬一番の冷え込みの朝がやってきた。地上から三十メートル。時間を二百倍に速めた映像――エゾマツの大木のマツボックリが開き、一センチメートル、〇・〇〇二グラムの種の旅を映し出す。乾燥した大気の中、森の中を回転しながら五百メートルも飛行して、雪の結晶の上に舞い降りる。雪は清潔で細菌も少ない。病弱な彼らにとってはうってつけなのだ。そして彼らは、ある特別な場所に向かって雪面を風に運ばれる。キラキラ、キラキラ。――その先に待ち受けていたのは、倒木。倒木はコケで被われ細菌も少なく水分も豊富。エゾマツの種は倒木の上でしか育たない。長い時間の中で、足元の倒木は消えてゆく。

春の到来。ひときわ鮮やかな紅色は、エゾマツの花。画面いっぱいにエゾマツの花。マツ

ボックリと同じ形の鮮烈な紅色の花。倒木の上にたどりつけなかった無数の種たちの命の輝きのように、天に向かって咲き誇る。ここでテレビは終わった。

◆◆◆◆◆

一説にマツは、神がその木に天降るのをマツ（待つ）意ともいう。六十万個もの種たちを地上に送り出す神の宿り木エゾマツは、繰り返し種を旅立たせながら、地球に果てしないメッセージを送り続けている。



▲フランスカイガンショウのマツボックリの種（スペイン・パドロンの林にて1994.4.27採集）

「たとえ倒木の上にたどりつかなくて途中で朽ちてしまっても、動物に食べられてしまっても、どの子もみんな素晴らしく、役立つ生涯を送っているのだよ。無駄なことやものなど、なにひとつとしてないのだよ。みんなそれぞれ同じ価値があり光り輝く存在なのだ」

あの寒い大雪の日、私が体験したささやかなヒバの木さんたちとの記憶とともに、北海道富良野の森のエゾマツさんとトドマツさんのそんなメッセージが、心に強く響いた。

（葉画家）

☆本文中の絵は筆者による

マツボックリ

紙／テンペラ　SIZE:180mm×142mm

マツボックリの種

紙／テンペラ　SIZE:227mm×158mm